

付加価値による鶏卵の直売と簿記を活用した経営管理に取り組む ～卵用名古屋コーチンの開発・普及に貢献～

一宮市 湯浅和征（ゆあさかずゆき）さん
養鶏

【平成23年6月27日掲載】

一宮市で養鶏に携わって47年目を迎え、名古屋コーチンなどの卵を生産し、直接販売をしている湯浅和征さんを紹介し（写真1、2）。湯浅さんは、平成22年に養鶏業界の発展に寄与し、顕著な業績をあげた方に対して贈られる高橋養鶏賞を受賞されました。

※高橋養鶏賞：50有余年、養鶏指導者として活躍された高橋廣治氏（昭和54年逝去）の功績を記念して、昭和50年に設立された高橋養鶏賞財団が、養鶏業に功績をあげた方を対象に授与している。

1 卵用名古屋コーチンの開発・普及に貢献

（1）主な取組

名古屋コーチンの卵は、卵殻の桜色が鮮やかで、卵黄の色が濃くて濃厚な「こく」のある美味しい卵だと言われています。

湯浅さんは平成9年、消費者に特色のある新鮮な卵を提供するため、名古屋コーチンの導入・飼養を開始し、その後、卵用名古屋コーチンの開発・普及を目的に数々の取組みを行いました。その主なものが①卵用名古屋コーチン開発に関する愛知県農業総合試験場への積極的な支援、②「名古屋コーチン研究会」の設立、③生産から販売を通じて、消費者へのイメージアップを図る取組みです。



写真1 湯浅和征さん、奥さんの洋子さん

（2）卵用名古屋コーチンの開発支援

「名古屋コーチンは、もともと卵をかかえやすい性質があり、産卵数も他の鶏に比べて少なかった。」と語る湯浅さん。これらを改良するため試験場と共同で、実用鶏の作出のため、現地試験を積極的に行い、現地情報や意見等を惜しまず試験場へ提供しました。

その結果、年間約250個産卵する「卵用名古屋コーチン」が作出され、平成12年から供給されました。

その後も飼養管理の現場から卵のサイズや卵殻の色合い等、問題点の改善に向けた提言や抱卵行動の遺伝子レベルでの除去に取り組む新系統開発への意見など、常により良い「卵用名古屋コーチンの開発」を支援しています。



写真2 鶏舎内の様子

(3) 卵用名古屋コーチンの普及

県内の養鶏農家への「卵用名古屋コーチン」の供給が始まると、平成14年に湯浅さんは、名古屋コーチン飼育農家と関係機関とともに、「名古屋コーチン研究会」を立ち上げ、会長に就任しました。研究会で、名古屋コーチンの飼養管理・販売方法について、会員と共に研鑽し、生産者名等が表示してあるラベル、販売所の「のぼり」、名古屋コーチン卵の特徴が書かれたポスターを作成するなど販売を促進し、名古屋コーチンのイメージアップと普及に大きく貢献しました。

さらに平成21年、「一般社団法人名古屋コーチン協会」の設立に尽力し、自らも副理事長として、名古屋コーチンの生産・流通に携わりながら消費者に対する信頼性確保と普及促進に寄与しています。

2 直売の取組

(1) 出荷から直売への経営方針の転換

湯浅さんは、飼養羽数を拡大してきましたが、都市近郊地域のため鶏舎用地の集積は困難で、規模拡大による収益の確保が困難になってきました。そこで、販売単価の向上をねらい、付加価値をつける方策として昭和58年に特色のある鶏卵の直売に取り組み始めました。

(2) 直売方法の工夫

平成9年から、白玉鶏を縮小して直売に向く卵として、赤玉鶏2,500羽と名古屋コーチン1,000羽を導入しました。自宅敷地内に直売施設を併設し、不在時の対応として卵の自動販売機を設置しました。また、愛知西農業協同組合の産直部会に加入して、JAグリーンセンター、JA丹陽西支店、JA大和支店、JA赤見店、Aコープ国府宮店での直売や喫茶店等への鶏卵の配達販売も始めました(写真3、4)。

現在の直売割合は、生産量の3割、売上げの5割を占めています。

3 簿記を活用した経営

「記帳は経営管理をする上で大切。」と語る湯浅さんは、昭和49年から簿記記帳を始め、昭和59年にはパソコンを利用した複式簿記記帳に切り替えました。記帳結果を利用して経営分析を行い、問題点の把握と改善を図りました。その一例として、記帳により経費の中の飼料費比率が70%であることがわかり、飼料工場から直接購入するよう改善したところ50%まで低下させることができました。

さらに湯浅さんは近隣の農業者へ、簿記記帳について指導的役割も担っていました。平成5年、地域の経営者50名を会員とした「経営簿記研究会」を設立し、自ら会長となり、簿記記帳の推進と税理士による税務相談などを定期的に行い、各農業者の経営管理能力の向上に貢献されています。



写真3 出荷作業の様子



写真4 直売所の様子

4 経営理念

経営理念についてお聞きしたところ「消費者の心をつかむには、高品質なものを生産することが大事である。そのためには名古屋コーチンの更新時期を必ず守り、黄身の色がだいたい色で、盛り上がっているものを常に目指している。」

また「経営管理については、妻と自分の2人の労力に見合った規模を維持しながら、労力の軽減を図るため育すう作業は外部委託するなど合理化を行う。」と語っていただきました。

執 筆：農業経営課

取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2011, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.